



TITLE:

京大広報 No. 349

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 349. 京大広報 1988, 349: 441-454

ISSUE DATE:

1988-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209330>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 349

京都大学広報委員会

目次

修士学位授与式における総長の ことば 総長 西島 安則……	442
卒業式における総長のことば 総長 西島 安則……	443
昭和62年度修士学位授与式……	445
昭和62年度卒業式……	445
部局長の交替等……	446
昭和63年度医療技術短期大学部 入学試験の結果……	447
昭和62年度医療技術短期大学部 の卒業式・修了式……	447
佐伯 富名誉教授が恩賜賞・日本 学士院賞を、数理解析研究所 柏原正樹教授が日本学士院賞を 受賞……	447
京都大学国際交流センター設置 準備会答申……	448
＜紹介＞ 工学部資源工学教室……	450
近世人の読書 一大惣本をめぐ って一の開催……	452
訃 報……	452
＜資料＞ 昭和62年度教育実習実施状況……	452
＜随想＞ ガラス溶融・今昔 名誉教授 田代 仁…	454

総長室に懸けられている鉄斎の水墨画「菜根図」
—関連記事本文 443 ページ—

修士学位授与式における総長のことば

昭和63年 3 月23日

総 長 西 島 安 則

本日ここに、名誉教授の先生方のご臨席を賜り、部局長の先生方、教職員の皆様とともに、昭和62年度の修士学位授与式を挙行し、1,009名の諸君に修士の学位を授与することができました。

新しく修士の学位を取得された諸君、おめでとうございます。諸君の門出を心よりお祝いします。

本日、修士の学位を取得されましたのは、文学研究科63名、教育学研究科11名、法学研究科12名、経済学研究科17名、理学研究科155名、薬学研究科32名、工学研究科573名、農学研究科146名、合わせて1,009名の皆さんであります。

昭和28年（1953年）に新制大学院が設置されて以来、本日新たに修士となられた皆さんを加えて、この35年間に、京都大学大学院修士課程は、23,895名の修士の諸君を世に送り出しました。

この修士課程において、諸君が攻究された学問は、それぞれの分野において現在の最前線に深い関わりをもつ、極めて高い水準のものであります。諸君がこの間に培った「基礎」と、若々しい感性が打ち出した新しい「発想」は、今後、研究を更に続ける場合にも、また、社会に出て、より広い分野で活躍する場合にも、必ずや大きな意義を持つものであると信じます。修士の学位論文はその荒削りな所にこそ力があり美しさがある様に私は思っています。諸君が、この攻究の中でやり遂げ得たこと、そして、それよりもやり遂げ得なかったもっと多くのことに大変重い意義のあることを、諸君は、これから後、改めて気づくようになると思います。これで済んだのではなくこれから始まるのです。

今日の修士学位授与式で諸君にはなむけのことばを贈るに際して、私は特別の感慨をもっています。それは、私が総長に就任した最初の大学院入学式において諸君を迎え激励のことばを述べたからです。それから2年、今日、こうして諸君に、はなむけのことばを贈ることになりました。

諸君を迎えることばにおいて、私はまず、大学院における「教育」と「研究」の一体性について話しました。そして、諸君が研究室において、指導教官、先輩、同僚と研究の喜びを素直に分ち合うことが、大学の学問の府としての活力の源泉であり、それがあって初めて学風は受け継がれると述べました。

大学の学問の伝統の継承と発展について、ケンブリッジ大学における Isaac Newton (1642～1727) とその後のことについて話しましたことを記憶している諸君もあると思います。17世紀に Newton は学問上の偉業を成し遂げました。それはケンブリッジ大学の大きな誇りであるとともに、それを越えることがまた大変難しいことであったのです。19世紀に新しい科学を17世紀の科学の伝統の基礎にたって切り拓こうと、若い三人の仲間、John Herschel (1792～1871)、Charles Babbage (1792～1871)、そして、George Peacock (1791～1858) が学生のときに誓った言葉 “To do our best to leave the world wiser than we found it.” について話しました。そして、今日の日を迎えて、ここに諸君の輝く眼の光を見て、私は諸君が立派に修士課程で学問を攻究することの喜びを知り、それを分かち合うことの楽しみを充分味わったことを知りました。

先日、私は1,009名の皆さんの研究課題を記した分厚い書類に目を通して、その一つひとつに籠もる想いをひしひしと感ずることができました。皆さんの修士論文の課題は皆さんが、これか

らどんな分野で活躍するにしても、決して忘れることのない課題となるでしょう。それは、これからの諸君のいろいろな活躍にとって皆さんの思索の一生の古巣のような懐かしい思い出を持って、いつも思い出す課題です。

今日、皆さんに最後に一言言っておきたいことは、「古典を読む」ということです。

皆さんは、修士課程でそれぞれの専攻分野を攻究してきました。改めて、古典をじっくり読むのに十分な素養を備えています。

いろいろな見方があると思いますが、20世紀の学術は、17, 18, 19世紀の土壌の上に咲き乱れた花とも言えます。極度に専門化、細分化された最先端を求めるのみでなく、ここで改めて古典を読んで、より根源的な意味において、人類の将来のための学術の総合に寄与せねばならないことを諸君に強調したいのです。

人文科学、社会科学、自然科学それぞれの分野で、革命的転機を画した仕事というものがあります。学問の分野によって“古典”ということの意味に違いがありますが、“書物”であれ“論文”であれ、著者が心血を注いで書き、時には堂々と、また、ある時には、おずおずと世に問うた仕事があります。その時代背景に立って、その著者の書いたものを読み込んで、著者の感激を少しでも感じることができれば、それは、時代を越えた共感であれ、友情であれ、師弟のちぎりであれ、本当に素晴らしいことではないでしょうか。“古典”は自分で探して自分で出会うものだと思います。

古典は一人ひとりが、心して求め、そして楽しんで、いつの間にか諸君の仕事の幅を深め、基礎を固めて行くと思います。

そこで、せめて一週間のうちに一晚は、あるいは、ひと月のうちに一日は、じっくり古典を読み耽る時を持ってほしいと思うのです。

自分で古典を求め、見つけ、そして、じっくり読んで楽しんで下さい。より広く、よりしっかりした基礎を固めることを常に心がけて下さい。

最後に、ここまで、諸君がひたすらに学問の攻究を続けることができたことを、それを支えて下さった多くの方々に、諸君と共に深く感謝したいと思います。

諸君の門出に当たり、ますますの健闘を心より期待するものであります。

卒業式における総長のことば

昭和63年 3月24日

総 長 西 島 安 則

卒業生諸君、卒業おめでとう。今日は、諸君の卒業を祝うかのように、明るい春の光が差ししています。

ここに、名誉教授の先生方のご臨席を賜り、部局長の先生方、教職員の皆様とともに、昭和62年度の卒業式を挙行することができました。

そして、文学部215名、教育学部53名、法学部370名、経済学部211名、理学部 298名、医学部 119名、薬学部 80名、工学部 858名、農学部 272名の諸君が京都大学をめたく卒業し、ここに新しく2,476名の学士が生まれました。これは本学の最も大きな慶びであります。

京都大学の卒業生は、旧制の時代に49,712名、新制になりましてから、本日卒業された諸君を加

えて、73,892名となりました。本学創設以来の卒業生の総数は、123,604名となります。これまで、それぞれの時代に、卒業生の皆さんは京都大学の学風を身につけ、自由と創造のたくましい力をもって、広く各分野で活躍してこられました。そして今日の世界の中の学問の府としての京都大学が作られてきたのであります。

今日は、諸君の門出に当たって、日本の近代芸術の創造に大きく貢献した国際的な巨匠であり、また京都大学にゆかりの深い富岡鉄斎のことを述べて、はなむけの言葉としたいと思います。

鉄斎は天保7年12月19日、太陽暦になおしますと、1837年1月25日に当たりますが、京都の三条室町に生まれました。京都の町をあちこち散策した諸君はよく知っていると思いますが、このあたりは、今も、京都の古い呉服問屋が集まっている所です。鉄斎の父、十一屋伝兵衛、富岡維叙^{これのぶ}は、その地で老舗の法衣商を営んでおりました。彼は維叙の次男で、幼少の頃から学問を志し、国学を学び、儒学を修めました。時は幕末、新しい時代への激動の時でした。

鉄斎は太田垣蓮月尼（1791～1875）の所で若い時を過ごしましたが、南画を小田海仙（1785～1862）に、また、大和絵を浮田一蕙（1795～1859）に学びました。また、春日潜庵（1811～1878）や梅田雲浜（1815～1859）について学問を修めました。

安政5年（1858年）の安政の大獄では、彼の師事した梅田雲浜、春日潜庵、浮田一蕙、頼三樹三郎（1825～1859）など、彼の先輩、親しい友人の多くが捕えられ、また獄に没しました。時に、鉄斎23歳でした。この頃から、鉄斎の旅が始まりました。南は鹿児島から北は北海道まで、彼の旅は50年間続きました。長崎に滞在した時には、清国の文人とも交遊しました。こうして、鉄斎は、南画、大和絵、浮世絵そして明・清の文人画からも、幅広く吸収しながら、自由に奔放に彼自身の芸術を作り上げていったのです。

その頃、ヨーロッパでは、鉄斎と同年代の画家たち、マネ（Edouard Manet, 1832～1883）、ドガ（Hilaire Germain Edgar Degas, 1834～1917）、セザンヌ（Paul Cézanne, 1839～1906）、モネ（Claude Monet, 1840～1926）、ルノワール（Pierre Auguste Renoir, 1841～1919）等が新しい芸術の流れを作りつつありました。新しい時代の空気が東西の芸術家の鋭い感性に刺激を与え、彼等の芸術に表現されていった時でした。

鉄斎は、彼の内なる生命を自由奔放に書きつつ、古典を読み、内なる人間性を豊かに高めて、年と共にますますみずみずしい画境を進めたのです。

桑原武夫名誉教授は、幕末・明治・大正を生きた巨匠鉄斎を評して、「改まった空気が敏感な知識人に鋭い刺激を与え、その思想と感情の強度をたかめたことは間違いがない。そのことが、激動する社会での主体性の堅持を困難にした面はたしかにあったが、これを乗り越えて成功した場合、かえって巨大な達成がそこにありえたのである。……彼は古い世界に毅然として自立しただけに、新時代にいささかもすねるそぶりはなく、誠実に生きえたのである。」と言っておられます。

鉄斎の長男、富岡謙蔵氏（1873～1918）は京都帝国大学文科大学（現在の文学部）の東洋史学科創設の翌年、明治41年（1908年）にその第一講座の講師に就任されました。鉄斎73歳のときでした。

鉄斎は京都大学の東洋学研究の基礎を樹立した狩野直喜（号は君山）教授、内藤虎次郎（号は湖南）教授らと親しく交わり、東洋学を更に攻究し、一方、謙蔵氏は度々中国に調査研究に赴き、中国書画の真髄を父鉄斎に伝えました。

鉄斎はこうして、70歳から80歳以降の晩年に至るまで彼の画境をさらに醇化させ芸術的人間性を深めて行ったのです。

今、総長室に、鉄斎の水墨画「菜根図」が懸っています。

大胆な構図で野菜が画かれており、その墨の濃淡が、葉のみずみずしい緑とその根元の丸味をもった白の冴えを感じさせます。まさに、雄渾な墨の造形ともいえる生気に満ちた作品です。大正4年(1915年)とありますので鉄斎かぞえ年80歳のときの作品です。

これは、当時の京都大学総長山川健次郎先生(第6代)が、鉄斎を訪れて執筆を依頼されたものです。

鉄斎は常々「わしの画を見るなら、まず賛を読んでくれ」と云っていたということです。

この画の賛は

「人常に菜根を咬み得ば、即ち、百事做す可し」と読めます。

前に、名誉教授の竹内 実先生にこの賛について伺ったことがあります。

これは、宋の人、汪革(字は信民)の言ですが、朱子はこの言葉を「小学」に集録しています。そして、「いまのひとのなかには、菜根を咬むことができないため、本心とはちがった生き方をしている人間が多い、自戒すべきである。」と注記しています。

「菜根を咬む」とは食べにくいもの、あるいは食べたいと思わないものを、口を動かし、歯で噛み砕くことであり、積極的でダイナミックな動作であります。

「百事做す可し」は、何事であれ困難なことも一大勇猛心をもって、着手し、完成することが出来るという意味にとれます。

80歳の鉄斎が、京都大学の学生のために書いてくれた賛

「人常に菜根を咬み得ば、即ち、百事做す可し」をこの卒業式において、諸君へのはなむけの言葉とします。

大きく動きつつある時代に門出する諸君に、幕末、明治、大正の激動の時を、自由に生き自らの芸術を創造した鉄斎の事を語り、これからの諸君の健闘を期待するものです。

この画は今総長室に懸っていますが、近く、学生諸君がいつでも見られる所に出すつもりです。母校に帰って来た時はそれを見て、今日の卒業式を思い出して下さい。

最後になりましたが、今日、京都大学卒業の日を迎えるまでの長い道程、諸君の学問の途を支え、いつも励まして下さった御家族はじめ皆様に諸君と共に厚く感謝したいと思います。

.....

<大学の動き>

昭和62年度修士学位授与式

3月23日(水)午前10時から、昭和62年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに学位記授与が行われ、「総長のことば」があって午前10時40分終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科63名、教育学研究科11名、法学研究科12名、経済学研究科17名、理学研究科155名、薬学研究科32名、工学研究科573名、農学研究科146名の計1,009名であった。

昭和62年度卒業式

3月24日(木)午前10時から、昭和62年度卒業式が、本学総合体育館において挙行された。卒業式は、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに行われ、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団、京都大学合唱団の協力)、合格証書授与、「総長のことば」のあと、「蛍の光」を斉唱して、午前10時50分に終了した。

新学士は、文学部215名、教育学部53名、法学部370名、経済学部211名、理学部298名、医学部119名、薬学部80名、工学部858名、農学部272名の計2,476名であった。

部 局 長 の 交 替 等

文学部長

中 久郎文学部長の任期満了に伴い、その後任として岡 照雄文学部教授（英語学英文学第一講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和64年3月31日までである。

教育学部長

和田修二教育学部長の任期満了に伴い、その後任として稲葉宏雄教育学部教授（教育課程講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

教養部長

佐野哲郎教養部長の任期満了に伴い、その後任として新田博衛教養部教授（芸術学担当）が4月1日任命された。任期は昭和64年3月31日までである。

化学研究所長

倉田道夫化学研究所長の任期満了に伴い、その後任として高浪 満化学研究所教授（分子生物学研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

結核胸部疾患研究所長

大島駿作結核胸部疾患研究所教授（内科学第二研究部門担当）が4月1日結核胸部疾患研究所長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

木材研究所長

西本孝一木材研究所長の任期満了に伴い、その後任として樋口隆昌木材研究所教授（リグニン化学研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

基礎物理学研究所長

西島和彦基礎物理学研究所教授（原子核理論研究部門担当）が4月1日基礎物理学研究所長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

ウイルス研究所長

日沼頼夫ウイルス研究所長の任期満了に伴い、その後任として田中春高ウイルス研究所教授（がんウイルス研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和64年3月31日までである。

経済研究所長

小池和男経済研究所長の後任として、杉本昭七経済研究所教授（比較経済研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

東南アジア研究センター所長

石井米雄東南アジア研究センター教授（東南アジア史研究部門担当）が4月1日東南アジア研究センター所長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

大型計算機センター長

長尾 真工学部教授（有線通信工学講座担当）が4月1日大型計算機センター長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

放射線生物研究センター長

武部 啓放射線生物研究センター長の任期満了に伴い、その後任として岡田重文放射線生物研究センター教授（晩発効果研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和64年3月31日までである。

ヘリオトロン核融合研究センター長

宇尾光治ヘリオトロン核融合研究センター長の任期満了に伴い、その後任として飯吉厚夫ヘリオトロン核融合研究センター教授（超高温プラズマ測定研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

放射性同位元素総合センター長

藤原元始医学部教授（薬理学講座担当）が4月1日放射性同位元素総合センター長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

環境保全センター長

大石 純環境保全センター長の任期満了に伴

い、その後任として眞嶋 宏工学部教授（電気冶金学講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

情報処理教育センター長

大野 豊情報処理教育センター長の任期満了に伴い、その後任として長谷川利治工学部教授（論理システム講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

医用高分子研究センター長

井田一夫医用高分子研究センター長の任期満了に伴い、その後任として筏 義人医用高分子研究センター教授（材料合成研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和65年3月31日までである。

保健管理センター所長

小川隆三保健管理センター教授（内科学専門）が4月1日保健管理センター所長に再任された。任期は昭和65年3月31日までである。

昭和63年度医療技術短期大学部 入学試験の結果

昭和63年度医療技術短期大学部入学試験の合格者氏名が、3月16日（水）に発表された。受験者数及び合格者数等は次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
看護学科	80人	271人	233人	88人
衛生技術学科	40	336	302	41
理学療法学科	20	165	137	21
作業療法学科	20	83	72	23
計	160	855	744	173

（医療技術短期大学部）

昭和62年度医療技術短期大学部 の卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日（木）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の臨席のもとに、短期大学部卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前11時終了した。卒業生は、看護学科73名、衛生技術学科35名、理学療法学科18名、作業療法学科18名で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20名の計164名であった。

（医療技術短期大学部）

佐伯 富名誉教授が恩賜賞・日本学士院賞を、数理解析研究所柏原正樹教授が日本学士院賞を受賞

このたび、佐伯 富^{さへき とみ}名誉教授に恩賜賞・日本学士院賞が、数理解析研究所柏原正樹^{かしわらまさき}教授に日本学士院賞がそれぞれ授与されることになった。授賞式は、6月上旬、日本学士院会館で行われる予定である。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

佐伯 富 名誉教授



佐伯名誉教授は香川県出身、昭和10年京都帝国大学文学部を卒業、東方文化学院京都研究所嘱託、東方文化研究所助手、京都帝国大学人文科学研究所助手を経て、昭和17年山口高等商業学校教授、昭和24年京都大学助教授（文学部）となり、昭和32年教授に昇任し、東洋史学第三講座を担当した。昭和49年本学を停年退官して、現在に至っているが、昭和50年から1年間、台湾大学客員教授に招かれた。

教授の今回の受賞の対象になった業績は、『中国塩政史の研究』（昭和62年）である。塩の専売制度は中国史において極めて重要な研究課題であるが、資料が膨大であり、制度が複雑であるために、その実態はこれまでほとんど明らかでなかった。教授は大学卒業以来、あえてこの難解な課題に取り組み、まず昭和31年に『清代塩政の研究』を著し、前人未踏の分野を切り開いたものとして学界の高い評価をうけた。その後もこの研究をすすめ、対象の時代を遡って、ここに中国古代から清末までの塩政通史を完成した。これは世界ではじめての画期的な業績である。この研究によって、塩が国家の興亡と密接な関係にあり、とくに塩の専売収入が宋代以後の独裁政治を支える財源として重きをなしたことが、専売の独占権を得た塩商が発展して社会に強固な基盤を築き、彼らが文化の興隆にも寄与したことが、統制がきびしくなると、私塩が横行し、その密売者が秘密結社をつくって社会を動揺させたことなど、塩の中国史における重要性が明確になった。

教授はほかにも、塩と並ぶ専売品であった茶に

について『宋代茶法研究資料』（昭和16年）を著し、また中国近世の政治制度、社会経済の多方面にわたる数多くの論文は『中国史研究』第一、第二、第三（昭和44、46、52年）に収められている。さらに『中国随筆索引』（昭和29年）はじめ30余種の索引類を編纂刊行して、中国史学の発展に大きく貢献した。これらの数々の輝かしい業績は、国際的にも高い評価をうけてきた。

教授は、本学において30年にわたって熱心に教育にたずさわり、学問のきびしさとそれへの不断の努力の必要とを身をもって示し、多くのすぐれた研究者を指導育成した。

以上のような研究教育における輝かしい業績を考えると、教授の今回の受賞はまことに慶ばしいことである。（文学部）

柏原 正樹 教授



柏原教授は茨城県で生まれ、昭和44年東京大学理学部数学科を卒業、同46年東京大学大学院理学研究科修士課程数学専攻を修了後、本学数理解析研究所助手に着任、同49年名古屋大学理学部助教授に昇任した。昭和52

年5月末には名古屋大学を退職して、米国マサチューセッツ工科大学客員科学者となり、また同年9月より米国プリンストン高等研究所研究員となった。昭和53年9月再び本学数理解析研究所助教授に着任、同59年新設の代数解析学研究部門担当の教授に昇任、現在に至っている。

今回の受賞の対象となった研究課題は「代数解析学」である。代数解析学は代数学の手法で解析学の問題を解く分野で、数理解析研究所佐藤幹夫所長が切り開き、柏原教授及び河合隆裕助教授が佐藤所長とともに発展させたものである。柏原教授は昭和45年修士論文において、線型偏微分方程式系の理論を代数解析的に構成し、微分作用素環の大局的次元が考えている基礎の多様体の次元に一致するという基本定理を確立した。これは現在D加群の理論として世界的に流行しているものの基である。爾来、佐藤所長・河合助教授と共同で超局所解析を展開し、偏微分方程式の代数的理論を確立した。例えば、昭和49年の学位論文は、修士論文の考えを発展させて、偏微分方程式の拡大過剰決定系に対しその解の有限次元性を確立したもので、これはその後の確定特異点型の極大過剰決定系の理論の研究を経て、解によって方程式を決定すると云う、所謂ヒルベルトの第21問題の高次元化に対する肯定的解答を与えることへと発展した。

柏原教授の研究の及ぶところは、代数幾何学・数論・トポロジー・リー群論と表現論・線型及び非線型偏微分方程式・数理物理学など数学の広汎な分野にわたり、しかも本質を鮮やかにえぐり出す性質のもので、解析学をはじめとする数学の各分野の研究方向に大きな影響を与えている。

柏原教授は河合助教授とともに、昭和62年度に朝日賞を受賞している。

（数理解析研究所）

京都大学国際交流センター設置 準備会答申

昭和62年2月18日、国際交流委員会から「京都大学国際交流センター設立について」の答申を受けましたが（京大広報No.327）、学内措置による「センター」設置の早期実現を図るため、先般、京都大学国際交流センター設置準備会を組織し、「京都大学国際交流センター」設立案の策定につ

いて諮問しましたところ、このたび同準備会から答申がありましたので、ここに掲載し、広く学内にお知らせします。

答申に至るまでに払われた同準備会委員各位のご尽力に、深い敬意と謝意を表しますと同時に、本センターの早期実現に向けて、各位のご理解・ご協力を切に望むところであります。

昭和63年3月22日

総長 西 島 安 則

昭和63年 1 月22日

京都大学国際交流センター
設 置 準 備 会 殿

総長 西 島 安 則

次の事項について理由を添えて諮問します。

「京都大学国際交流センター」設立案の策定
(理由)

「京都大学国際交流センター」設立案の策定については、昭和61年 9 月、国際交流委員会に諮問し、同62年 2 月、同委員会委員長から答申を得、昭和63年度の歳出概算要求を含め、同委員会を中心に標記センター設立の実現に向けて、鋭意検討・努力が払われて参りましたが、未だ実現されるに至っておりません。

しかしながら、各分野における学術国際交流の進展、急増する留学生に適切に対応するためには早急にこれが実現を図る必要があります、ここに改めて、広く学内の関係者の参画を得て、標記センター設置準備会を組織し、実現性のあるセンターの機能、組織、管理機構、場所等について、具体的に取組んで頂くことが緊要であると考え、検討を依頼するものであります。

昭和63年 2 月19日

総長 西 島 安 則 殿

京都大学国際交流センター設置準備会
委員長 川 島 良 治京都大学国際交流センター設置準備会
答申について

本準備会は、さきに諮問のあった「京都大学国際交流センター」設立案の策定について、審議を重ねて参りましたが、このたび、答申の成案を得ましたので、ここに答申いたします。

総長裁定による「京都大学国際交流センター」
の設置について

【設置の経緯、趣旨】

本学としては、全学的な視点からの国際学術交流の推進を図るため、「京都大学国際交流センター」の実現を期し、それに関する概算要求を行なってきた（京大広報No327）。この概算要求は未だ認められるに至っていないが、同要求を進める一方でそれが認められるまでの間、学内措置としての「国際交流センター」（以下センターとよぶ）を本学に設置する。このセンターにおいては国際交流に関して本学が計画している構想のうちから、とりあえず実現可能な機能について、これに着手する。

【機能】

当面着手すべきと思われるセンターの機能としては、つぎの事項が考えられる。

- (1)外国人留学生及び外国人研究者に対する日本語、日本文化、並びに日本事情等に関する教育
- (2)留学生に対する助言、指導
- (3)諸外国の大学や教育・研究機関からの要請に応じた教育・研究に関する協力体制
- (4)国際交流を推進するのに必要な資料、情報の収集・整備・提供
- (5)その他

【構成】

教官組織

- (1)センター長
- (2)専任教官
- (3)センターが実施する事業に関連する教官
- (4)留学生の受入れに伴う専門教育教官

当面は併任教官をもってあて、可及的速やかに専任の教官を配置する。

事務組織

上記のセンター機能を果たすのに最善と考えられるような事務機構の対応・整備が必要である。

【管理機構】

センターの運営管理を行なうため、運営協議会

をおく。

運営協議会としてつぎの構成が考えられる。

- (1) センター長
- (2) センターに所属する教授および助教授
- (3) 学部および教養部から教授または助教授各 1 名
- (4) その他総長が必要と認める教授、助教授または講師若干名
- (5) 学生部長

【施設、設備】

センターに必要な本格的な建物等は概算要求にまたなければならないとしても、とりあえず学内措置によるセンターの機能を果たすためには、講義室、事務室及び会議室等が本部構内またはその周辺に確保される必要がある。

＜紹介＞

工学部資源工学教室

資源工学教室は明治31年創設された採鉱冶金学科を母体として発展してきた歴史の古い教室である。昭和17年冶金学教室と分離して鉱山学教室となり、その後の社会情勢の変遷に対応して、昭和39年改組して資源工学教室となった。

教育・研究の内容は工業原料とエネルギーに係わる鉱山学から逐次改変され、いまでは地下構造、鉱物資源及び地盤や岩盤など自然を対象とする工学分野はもとより、金属、機械、電気、応用化学などの主要な各種工業分野に係わる広範な理論と技術の教育・研究を行っている。

本教室に開設されている6つの各講座の内容を紹介するとつぎのようである。

応用地質学講座

従来は主として鉱物資源の探査と開発に係わる鉱山地質学の分野の教育・研究が行われていた。

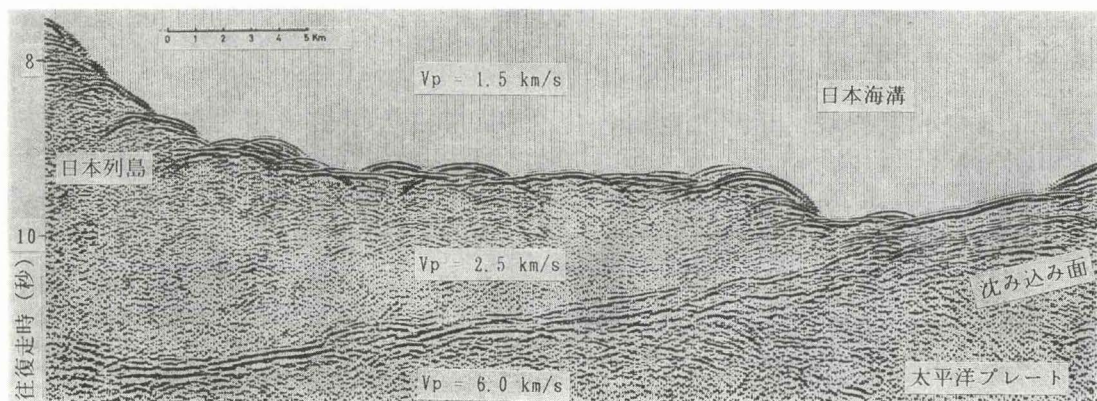
鉱物資源の確保は今後も重要な課題ではあるが、近年の国内での鉱物資源探査開発活動の縮小に伴い、土木建設、防災、環境保全などに係わる応用地質学の分野に研究の重点が移され、表層地盤の強度、コンクリート骨材、岩盤の風化過程に関する研究などが行われている。

探査工学講座

弾性波や電流・電磁界などを用いて地下構造や地下資源の存在を調べる物理探査、及び物理探査による地質材料の工学的評価に関する教育と研究が行われている。近年、データ処理技術が向上し、地下の探査結果をあたかも目で見ているかのように表現できるようになった。図は日本海溝を横断する測線で実施された反射法弾性波探査によって得られた断面図である。この結果から太平洋プレートが日本列島の下へもぐり込んでいる様子を理解することができる。

開発工学講座

地下資源の採取や地下の有効利用のための技術



地下探査の一例

開発を目的とし、岩石や岩盤の諸特性、掘さく法、合理的な岩盤構造物の設計など、岩盤力学とその応用に関する教育と研究が行われている。

最近では、岩石の物性に関する実験的研究で新しい AE 手法や超音波 CT が開発され、岩石の破壊実験に利用されている。また、岩盤特性の計測技術並びに岩盤構造物の解析法の研究も行われそれぞれ成果をあげている。

応用計測学講座

材料内部にある不可視の異常部分を磁気その他の物理を応用して検出し、画像化し、評価する非破壊検査の学理と関連技術を主体とする応用計測の教育と研究が行われている。教育理念として、未知の事象に対する探求心、解析力、創造性、応用力などが高まって、将来いかなる分野においても時代の変遷の影響を受けずに対応できる能力を育成することに目標をおいている。

精製工学講座

各種の鉱物資源、工業中間産物を微粉化し、物理化学的手法により有用成分を抽出、濃縮、分離、精製し、工業原料として有効利用するための教育と研究が行われている。とくに、複雑低品位鉱や希土類鉱物を対象とした研究は国際共同研究として推進されている。また、新素材の超微粒子に関連して、粒子生成、物性測定、分級、加工、機能性化に対応する新しい技術分野を開拓する試みも行われている。

加工設備学講座

製鉄・製鋼設備、連続鋳造設備、熱間・冷間圧



鉱物標本室

延等の設備工学的な教育と研究を行っている。連続鋳造法によって製造される鋳片はかなり高い温度を保持している。この高温鋳片を直接熱間圧延することにより、ホット・コイルに加工するという鋼板製造技術上画期的な方法が加工設備学講座の数値シミュレーションの結果から実現した。この方法は、省エネルギーの面からのみでなく、設備の連続化と省工程化の面からも優れたもので、わが国で開発された世界に誇りうる技術の一つである。

資源工学教室には比企 忠教授（明治42年、採鉱学第3講座担当）が国の内外から多数の鉱物や鉱石を蒐集して創設した鉱物標本室がある。この標本室には、多数の卒業生が寄贈したものも加わり、15,000点余の標本が収蔵されている。中には他に見ることのできない非常に貴重な標本もあり、長年にわたる教室の遺産として継承・保存され、応用地質学や精製工学などの教育や研究に有効に利用されている。

（工学部）

近世人の読書—大惣本をめぐって—の開催

京都大学附属図書館に所蔵される大惣旧蔵書約3,700点の目録の第一分冊が、このたび刊行される運びとなり、これを記念して標記展示会を開催することになりました。大惣とは貸本屋「大野屋惣八」の略称です。明和年間から明治中期まで百数十年間、名古屋で営業していた全国一の貸本屋といわれ、江戸時代における有料図書館的な役割を果していました。廃業後その蔵書が売却されましたが、現在大惣本の最大のコレクションは京都大学附属図書館にあります。

なお、期間中に本展示会のテーマに関連した記念講演会も開催しますので、多数ご来場下さい。

記

展 示 会

日 時：4月11日（月）～20日（水）

（17日（日）を除く）

午前9時30分～午後4時30分

会 場：京都大学附属図書館展示ホール
（3F）

記念講演会

日 時：4月13日（水）午後2時～3時30分

会 場：京都大学附属図書館A Vホール
（3F）

講 師：日野龍夫氏（京都大学文学部教授）

演 題：「近世の貸本屋」

（備考）展示会、記念講演会とも一般公開、
入場無料です。

（附属図書館）

計 報

中原與茂九郎（本学名誉教授）

3月28日逝去，87歳。大正14年本学文学部卒業。昭和26年本学分校（現教養部）教授就任，38年退官。50年勲

三等旭日中綬章。専門はアッシリア学。

＜資 料＞

昭和62年度教育実習実施状況

昭和62年度における教育実習は41都道府県にお

よぶ国公私立の高等学校174校，中学校40校，養護学校1校の協力を得て，昭和62年5月から昭和63年3月までの間に実施された。

1. 学部別の履修状況

区 分 \ 学 部	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	薬学部	工学部	農学部	計
参 加 申 込 者	109人	32人	9人	9人	117人	1人	52人	47人	376人
取 り 止 め た 者	13	3	1	2	10	0	8	7	44
実 習 終 了 者	96	29	8	7	107	1	44	40	332

2. 実習校の配当方式

学 部 区 分		文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	薬学部	工学部	農学部	計
京 都 市 配 当	市立中・高校	5人	3人	人	1人	4人	人	5人	人	18人
	養護学校		1							1
	取り止めた者	2	1		0	3		2		8
	実習終了者	3	3		1	1		3		11
出 身 校	出身中・高校	104	28	9	8	113	1	47	47	357
	取り止めた者	11	2	1	2	7	0	6	7	36
	実習終了者	93	26	8	6	106	1	41	40	321

(注) 出身校は京都市立以外の国公立校である。

3. 教科別、校種別の人数

学 部 区 分		文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	薬学部	工学部	農学部	計
国 語	中 学 校	1人	1人	人	人	人	人	人	人	2人
	高 等 学 校	17	1							18
英 語	中 学 校	2			1				1	4
	高 等 学 校	26	12	2						40
社 会	中 学 校	5	2	2	2					11
	高 等 学 校	43	7	4	4				1	59
理 科	中 学 校		1			5	1	4	3	14
	高 等 学 校	1	3			63		18	32	117
数 学	中 学 校					5		3	1	9
	高 等 学 校	1	1			34		19	1	56
保 健 体 育	中 学 校									0
	高 等 学 校								1	1
計	中 学 校	8	4	2	3	10	1	7	5	40
	高 等 学 校	88	24	6	4	97	0	37	35	291
養 護 学 校		0	1	0	0	0	0	0	0	1
合 計		96	29	8	7	107	1	44	40	332

(教職教育委員会)

